

天王平遺跡発掘調査報告

— 第7次調査 —

桑名市教育委員会

2007年3月

刊行のことば

愛知県・岐阜県と接する桑名市は、三重県の玄関口として古代から人々を受け入れてきました。桑名と大垣をむすぶ国道258号線は、江戸時代には美濃街道と呼ばれた街道に沿っており、古くから人々が行き交う道でした。そしてこのルートは、天武天皇や聖武天皇が行幸した道でもあり、天王平という地名は、壬申の乱の折、天武天皇がこの地で休息し英気を養ったことに因んでつけられたと言われています。

天王平遺跡は、これまでに7回の調査が行われ、多くの竪穴住居・掘立柱建物跡が見つかっています。遺跡をとおして、古代の人々の生活を垣間見、郷土の歴史を知る機会となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の発掘調査にあたりご協力いただいた地元の皆様をはじめとした関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成19年3月

桑名市教育委員会

教育長 小津 嘉彦

例 言

- 1 本書は、桑名市多度町小山字天王平に所在する、天王平遺跡第7次調査の発掘調査報告である。
- 2 調査の期間・原因・体制
期間 平成18年9月25日～平成18年12月8日
原因 市道天王平5号線新設工事
体制 調査主体 桑名市教育委員会
調査担当 石神教親（桑名市教育委員会多度支局）
調査参加 伊藤澄子 伊藤夏子 隅田初美 多賀安一 山室重美
発掘調査業務・測量業務については、(株)GIS東海三重営業所に委託して実施した。
- 3 調査にかかる費用は、桑名市が負担した。
- 4 出土遺物の整理は後藤太一（(株)GIS東海）が担当し、報告書の執筆は石神教親が担当した。
- 5 遺物実測図は、3分の1の縮尺に統一したが、それと異なるものについては個々に表記した。また、遺物の名称については、椀・碗・鉢を碗に、坏・杯を杯に統一した。
- 6 本書で使用している記号は以下のとおりである。
SB 竪穴住居 SD 溝 SH 掘立柱建物 SK 土壌
- 7 調査にあたっては、多度建設課・小山自治会をはじめ、隣地の地権者の皆様からご協力を得た。
- 8 調査に関する記録類および出土遺物は、桑名市教育委員会で管理・保管している。

本文目次

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1

第2章 調査成果

第1節 調査区と層位	10
第2節 遺構	11
第3節 遺物	13

第3章 まとめ	19
---------	----

図目次

図 1	桑名市位置図	1	図10	S D 0 1 実測図	12
図 2	周辺遺跡図	2	図11	S D 0 2 実測図	13
図 3	調査区位置図	4	図12	S D 0 4 実測図	14
図 4	調査区平面図(グリッド配置図)	5	図13	S H 0 1 実測図	15
図 5	調査区断面図(1)	7	図14	S B 0 1 出土遺物実測図	16
図 6	調査区断面図(2)	8	図15	溝出土遺物実測図	17
図 7	調査区断面図(3)	9	図16	ピット出土遺物実測図	18
図 8	S B 0 1 実測図	10	図17	遺構外出土遺物実測図	18
図 9	S B 0 2 実測図	11			

表目次

表 1	出土遺物計測表	20
-----	---------	----

写真図版

図版 1	前半区完掘状況(東から) 後半区完掘状況(西から)	図版 4	S D 0 2 遺物出土状況(西から) S D 0 2 完掘状況(南から)
図版 2	S B 0 1 遺物出土状況(南から) S B 0 1 カマド遺物出土状況(南から) S B 0 1 完掘状況(南から)	図版 5	S B 0 1 出土遺物
図版 3	S B 0 2 カマド完掘状況(東から) S B 0 2 完掘状況(東から)	図版 6	溝出土遺物
		図版 7	遺構外出土遺物

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

桑名市は、三重県の北端に位置し、岐阜県と愛知県と接する。平成16年12月に桑名市・長島町・多度町の1市2町が合併して成立した。

天王平遺跡がある小山丘陵は、養老山地から源を発する多度川と肱江川に挟まれ、標高は30～100mほどである。多度山（大山）に対して小山と呼ばれるようになったといわれている。現在では、造成によって多くの部分が宅地などへと変貌をけている。北側は、多度川によって削られ急傾斜となり、遺跡がある東側は緩やかに傾斜し東端は段丘崖となっている。さらにその東側は、沖積低地となり、水田が広がっている。

第2節 歴史的環境

小山丘陵周辺は、数多くの遺跡が分布している（図2）。丘陵の西側に位置する寺山遺跡からはナイフ形石器が見つかり、桑名市内では珍しい旧石器時代の遺跡である。

縄文時代は、天王平遺跡・寺山遺跡など数ヶ所の遺跡で遺物が見つかるだけで、遺構は今のところ確認されていない。

古墳時代に入ると、丘陵南側で古墳が多数造営され、大久保古墳群は16基があったとされている。この内、1基だけが昭和37年4月に調査がされ、胴張り形の横穴式石室を持ち、須恵器が出土している。発掘調査が行われている南小山廃寺では、古墳を削平して寺院が建っており周溝と思われる溝が検出され、遺物も出土している。おそらく、古

墳の数はもっと多かったと思われる。古墳群の大半が、開墾などにより滅失しているが、地元で出土品が保管され、須恵器の杯蓋・杯身・高杯などがある。天王平遺跡では、これまでの調査で古墳時代の遺物は出土していたが、明確な遺構は第6次調査の土壌だけである。

南小山廃寺は、戦前から瓦や鴟尾が見つかり、昭和60年の発掘調査によって単弁・素弁蓮華文軒丸瓦、三重弧型押簾状文軒平瓦が出土している。天王平遺跡に包摂される位置に、北小山廃寺があり南小山廃寺と同文の軒丸瓦が出土している。ただ、ここに関しては瓦窯であった可能性もある。

古代の遺跡では、これまでの調査で天王平遺跡から奈良・平安時代の竪穴住居が多数検出されており、第4次調査では10世紀代の古代墓も確認されている。古代墓では、南小山廃寺の東側の丘陵から蔵骨器が出土してお



図1 桑名市位置図



図2 周辺遺跡図(S:1/20000)

1天王平遺跡 2柚井遺跡 3一ノ谷A遺跡(一ノ谷経塚・中近世墓群含む) 4一ノ谷B遺跡(3・4内に一ノ谷古墳群)
 5一ノ谷C遺跡(横山古墳群含む) 6関東遺跡 7宇賀神社古墳群 8長尾遺跡 9長尾古墳群 10宇賀A遺跡 11宇
 賀B遺跡 12宇賀C遺跡 13柚井城跡 14愛宕中世古墳群 15西城古墳 16多度経塚 17多度神宮寺 18多度A遺
 跡 19多度B遺跡 20柿宜谷中世墓群 21猫ヶ谷遺跡 22朝拝下遺跡 23宮地中世墓群 24八壺口遺跡 25八壺谷
 経塚 26八壺谷古墳・古墓 27西野遺跡 28寺山遺跡 29北猪飼A遺跡 30北猪飼B遺跡 31西之河原遺跡 32西田
 面遺跡 33猪飼城跡 34砂田遺跡 35大久保遺跡・古墳群 36宮前遺跡 37中ノ谷遺跡 38南小山廃寺 39西谷通遺
 跡 40西谷通古墓 41貝殻谷遺跡 42小山城跡 43東谷通遺跡 44林崎遺跡 45西天王平遺跡 46北小山廃寺 47
 尾津森遺跡 48馬場遺跡 49森下遺跡 50藤塚遺跡 51石坪遺跡 52下野代遺跡 53石原遺跡 54星鳥遺跡

り（西谷通古墓）、南小山廃寺にかかわる人物の墓と推定されている。天王平遺跡の西側にある西天王平遺跡からは石組みの中から小形の横瓶が出土し、墓であった可能性もある。

天王平という地名は壬申の乱の折、天武天皇が訪れたことに由来する伝承が地元には残されている。この場所に逗留したかはともかくとして、桑名から北上してこの辺りを通過していることは間違いなく、養老山地沿いを通る古代からの街道があったことを物語っている。また、古代東海道の駅の一つである榎撫駅が丘陵東側の戸津のあたりと考えられている。榎撫駅の初見は『日本後紀』延暦24年（805）11月7日条で、『同』弘仁3年5月8日条には「今日桑名郡榎撫駅。達尾張国。既是水路。」とあり、ここからは船での行程であった。日本武尊の伝説も残るように、多度が尾張国へと渡る重要な位置にあったことがわかる。

縄文海進によって伊勢湾は現在の大垣付近までその範囲を広げた。その後、気候の変動や河川の沖積作用によって、徐々に海岸線は南へと後退していった。古代においては、多度と対岸の津島（馬津駅）の間が海岸線であった。海岸線が移動して陸地化が進んだ場所は、人々の生活の場となり、中世以降、平野部には香取荘・野代荘・富津御厨などが成立した。そして、小山丘陵の東側には、馬場・藤塚・森下・尾津森遺跡があり、中世陶磁器が多く採集されている。天王平遺跡・南小山廃寺などでは逆に12世紀以降の遺構・遺物が少なくなる。

中世の遺跡では多度町内には多くの中世墓群がみられる。その内、小山丘陵北端の多度川に面する部分には祢宜谷中世墓群があり古瀬戸や常滑焼の蔵骨器が出土し、五輪塔など

の石塔もみつまっている。他の中世の遺跡では森下遺跡から室町時代の瓦などが出土し、小山城跡が丘陵南側に位置している。



図3 調査区位置図

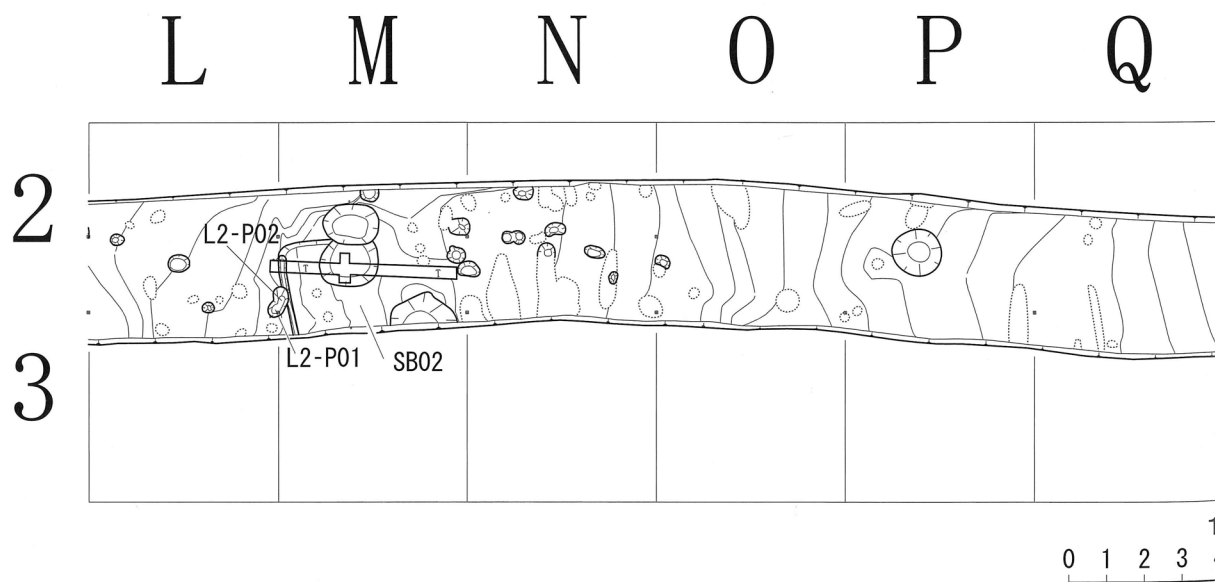
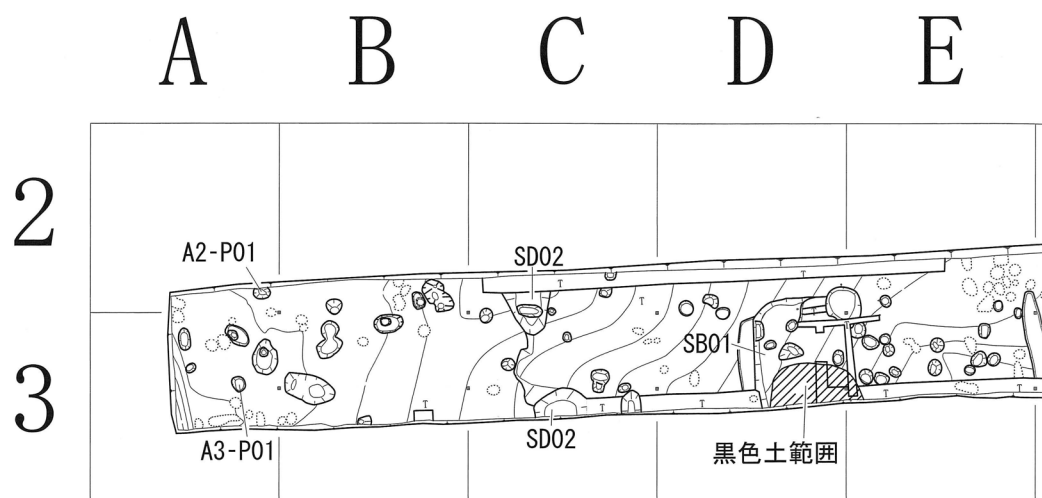
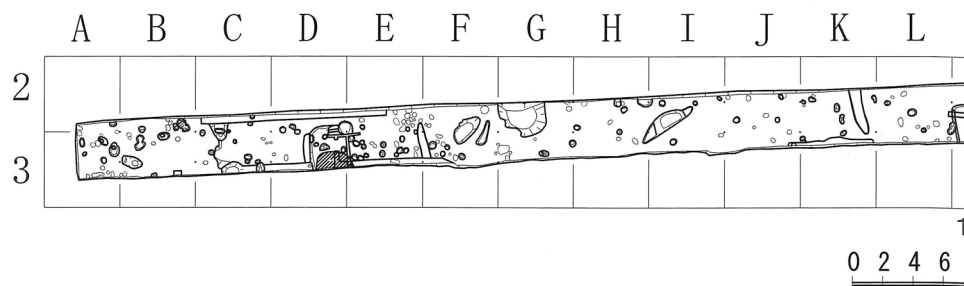
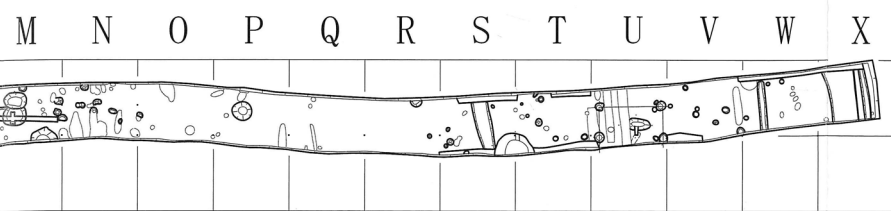
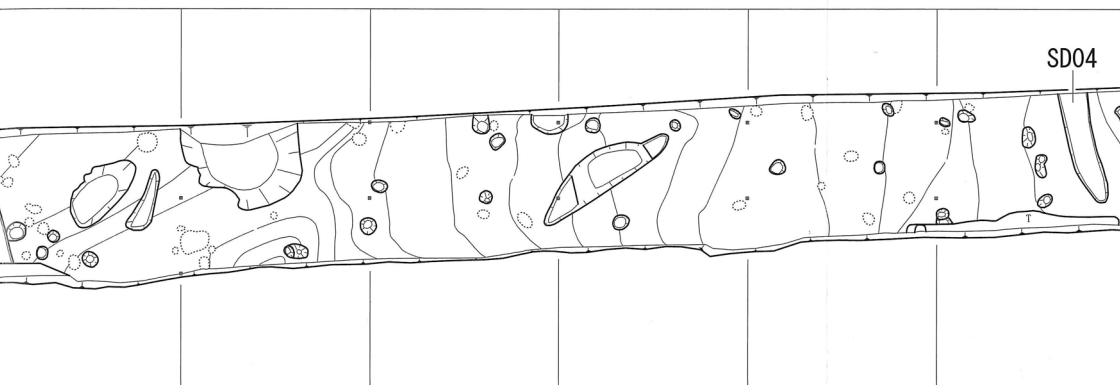


图4 調査区平



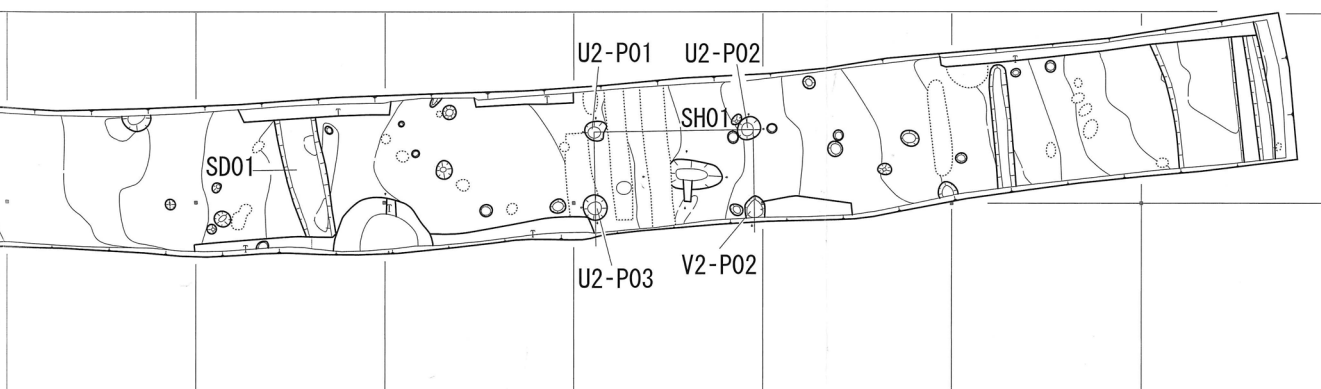
1 : 500
8 10 20m

F G H I J K



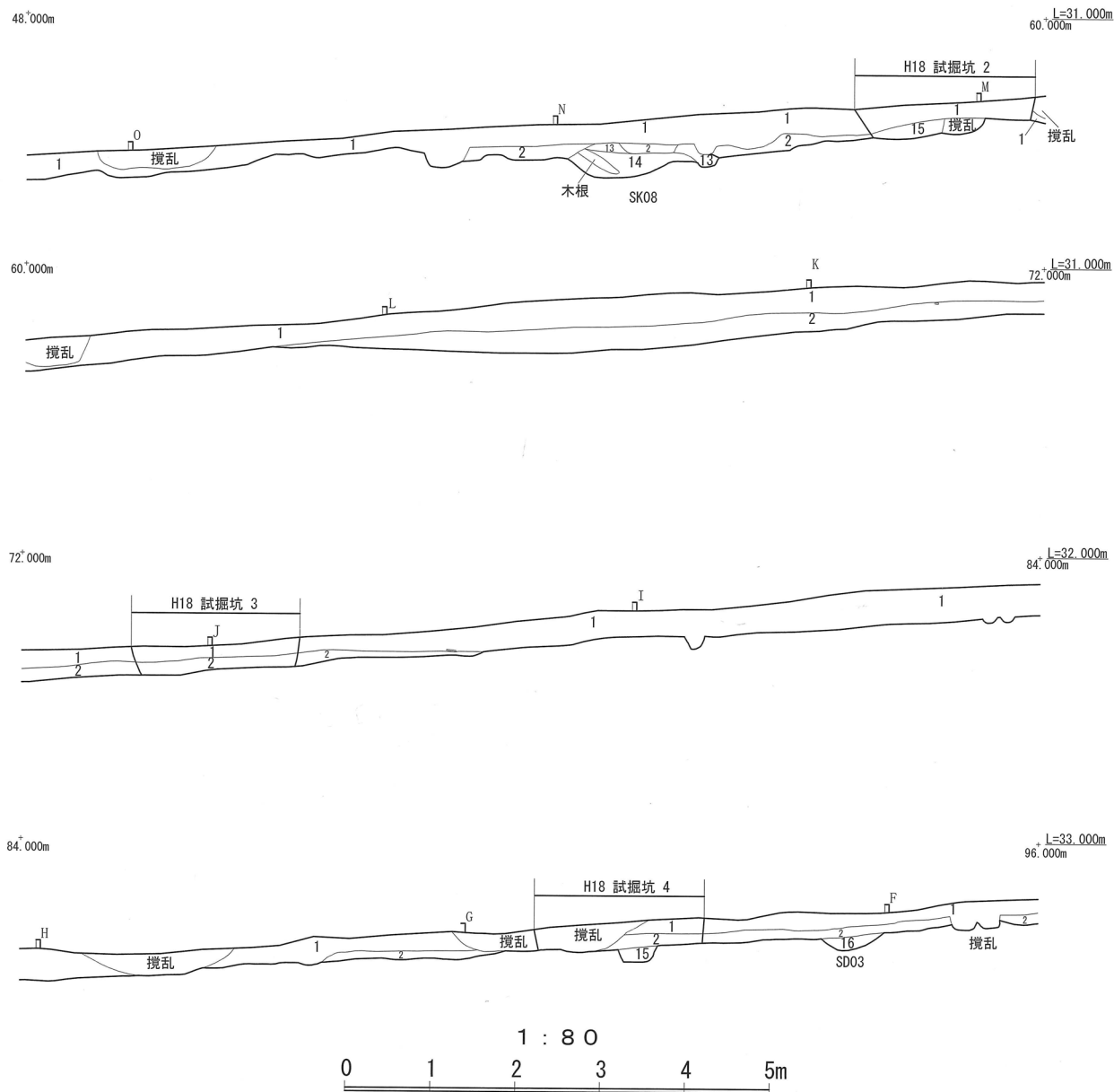
SD04

R S T U V W X



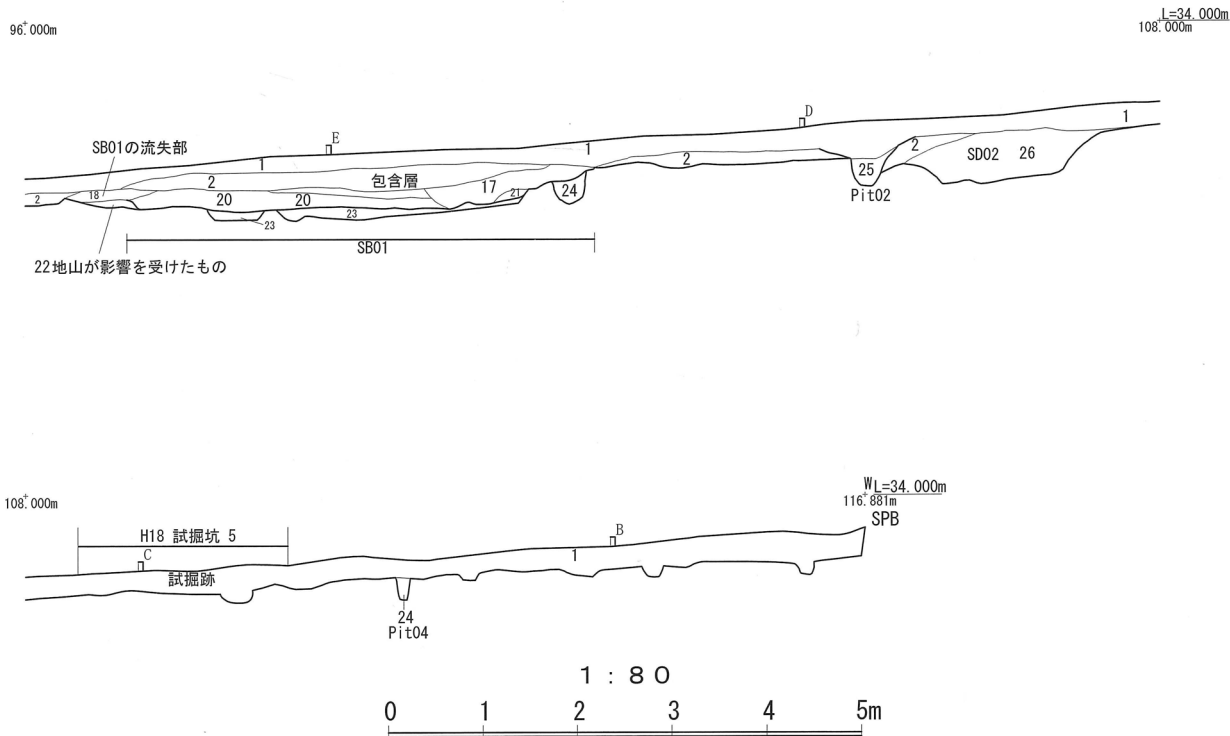
1 : 200
4 5 6 7 8 9 10m

面図(グリッド配置図)



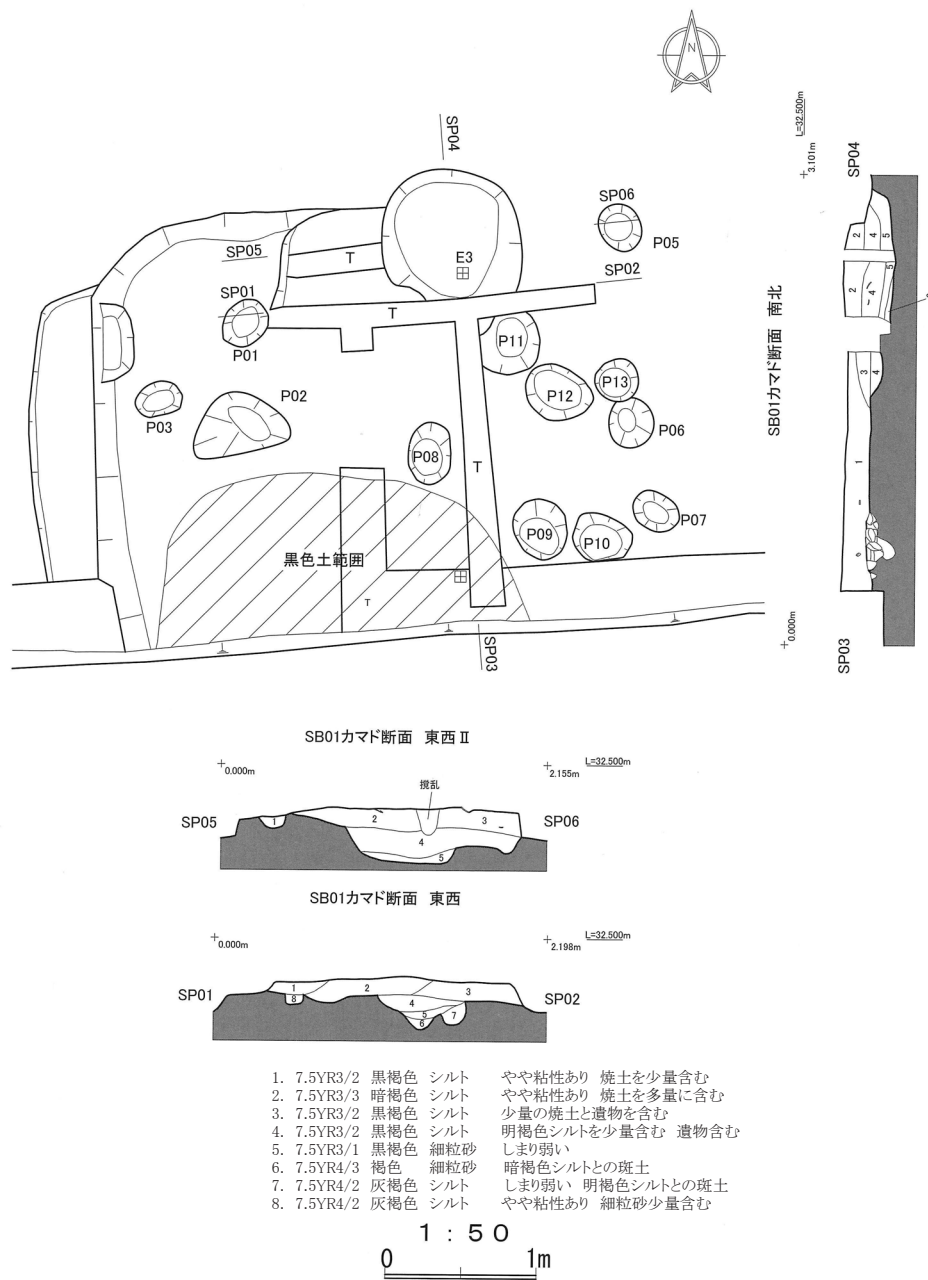
層位	土色	土質	備考
1	7.5YR4/2	灰褐色 表土	
2	7.5YR3/3	暗褐色 包含層	
3	7.5YR3/2	黒褐色 シルト	SH01PIT、地山が少量混じる
4	7.5YR4/3	褐色 細粒砂	SK02-1、礫を含む、明黄褐色細粒砂との斑土
5	7.5YR4/6	褐色 細粒砂	ややしめる SK02-2、少量の礫を含む
6	7.5YR3/2	黒褐色 砂質シルト	ややしめる SK02-3、大型の礫が混入、褐色シルトを少量含む
7	7.5YR4/4	褐色 砂質シルト	ややしめる SK02-4、礫を含む、暗褐色シルトとの斑土
8	7.5YR3/2	黒褐色 砂質シルト	やや粘性あり SK02-5、少量の褐色シルトを含む
9	7.5YR3/2	黒褐色 砂質シルト	やや粘性あり SK02-6、一部に黒褐色シルトを含む
10	7.5YR4/3	褐色 シルト	粘性強い SK02-7、灰黄褐色シルトとの斑土
11	7.5YR3/1	黒褐色 シルト	やや粘性あり SK02-8、礫を含む
12	7.5YR4/2	灰褐色 砂質シルト	硬くしめる SD01
13	7.5YR3/3	暗褐色 シルト	やや粘性あり SK08-1、地山との斑土
14	7.5YR5/6	明褐色 シルト	SK08-2
15	7.5YR2/2	黒褐色 シルト	やや粘性あり 黒味を帯びる
16	7.5YR4/2	灰褐色 シルト	ややしめる SD03、黒味を帯びる
17	7.5YR3/2	黒褐色 シルト	粘性強い やや黒味を帯びる
18	7.5YR3/2	黒褐色 シルト	ややしめる 灰褐色シルトとの斑土
19	7.5YR3/2	黒褐色 シルト	やや粘性あり SB01 1-a、焼土を少量含む
20	7.5YR3/2	黒褐色 シルト	やや粘性あり SB0 11-b、焼土を少量含む、明褐色シルトが少量混じる
21	7.5YR3/2	黒褐色 シルト	粘性強い SB1 1-c、明褐色シルトとの斑土
22	7.5YR4/2	灰褐色 シルト	ややしめる 地山が上層の影響を受けたもの
23	7.5YR4/2	黒褐色 シルト	やや粘性あり 少量の礫を含み、下層との境界面には多量の礫がみられる
24	7.5YR4/1	褐灰色 シルト	ややしめる
25	7.5YR4/2	灰褐色 シルト	ややしめる 明褐色シルトとの斑土
26	7.5YR3/2	黒褐色 シルト	粘性強い SD02、自然流路か

図6 調査区断面図(2)



層位	土色	土質	備考			
1	7.5YR4/2	灰褐色 表土		18	7.5YR3/2	黒褐色 シルト
2	7.5YR3/3	暗褐色 包含層		19	7.5YR3/2	黒褐色 シルト
3	7.5YR3/2	黒褐色 シルト	SH01PIT、地山が少量混じる	20	7.5YR3/2	黒褐色 シルト
4	7.5YR4/3	褐色 細粒砂	SK02-1、礫を含む、明黄褐色細粒砂との斑土	21	7.5YR3/2	黒褐色 シルト
5	7.5YR4/6	褐色 細粒砂	ややしまる SK02-2、少量の礫を含む	22	7.5YR4/2	灰褐色 シルト
6	7.5YR3/2	黒褐色 砂質シルト	ややしまる SK02-3、大型の礫が混入、褐色シルトを少量含む	23	7.5YR4/2	黒褐色 シルト
7	7.5YR4/4	褐色 砂質シルト	ややしまる SK02-4、礫を含む、暗褐色シルトとの斑土	24	7.5YR4/1	褐灰色 シルト
8	7.5YR3/2	黒褐色 砂質シルト	やや粘性あり SK02-5、少量の褐色シルトを含む	25	7.5YR4/2	灰褐色 シルト
9	7.5YR3/2	黒褐色 砂質シルト	やや粘性あり SK02-6、一部に黒褐色シルトを含む	26	7.5YR3/2	黒褐色 シルト
10	7.5YR4/3	褐色 シルト	粘性強い SK02-7、灰黄褐色シルトとの斑土			
11	7.5YR3/1	黒褐色 シルト	やや粘性あり SK02-8、礫を含む			
12	7.5YR4/2	灰褐色 砂質シルト	硬くしまる SD01			
13	7.5YR3/3	暗褐色 シルト	やや粘性あり SK08-1、地山との斑土			
14	7.5YR5/6	明褐色 シルト	SK08-2			
15	7.5YR2/2	黒褐色 シルト	やや粘性あり 黒味を帯びる			
16	7.5YR4/2	灰褐色 シルト	ややしまる SD03、黒味を帯びる			
17	7.5YR3/2	黒褐色 シルト	粘性強い やや黒味を帯びる			
						ややしまる 灰褐色シルトとの斑土
						やや粘性あり SB01 1-a、焼土を少量含む
						やや粘性あり SB01 1-b、焼土を少量含む、明褐色シルトが少量混じる
						粘性強い SB01 1-c、明褐色シルトとの斑土
						ややしまる 地山が上層の影響を受けたもの
						やや粘性あり 少量の礫を含み、下層との境界面には多量の礫がみられる
						ややしまる
						ややしまる 明褐色シルトとの斑土
						粘性強い SD02、自然流路か

図7 調査区断面図(3)



第2章 調査成果

第1節 調査区と層位

今回の調査は、市道天王平5号線の新築工

事に伴い調査を行った。西側を通る市道の建設時に第3次調査が行われている。

天王平遺跡全体は、西から東に向かって緩やかに傾斜する丘陵上にあり、本調査区も東に向かって傾斜し、地表面では西端が標高

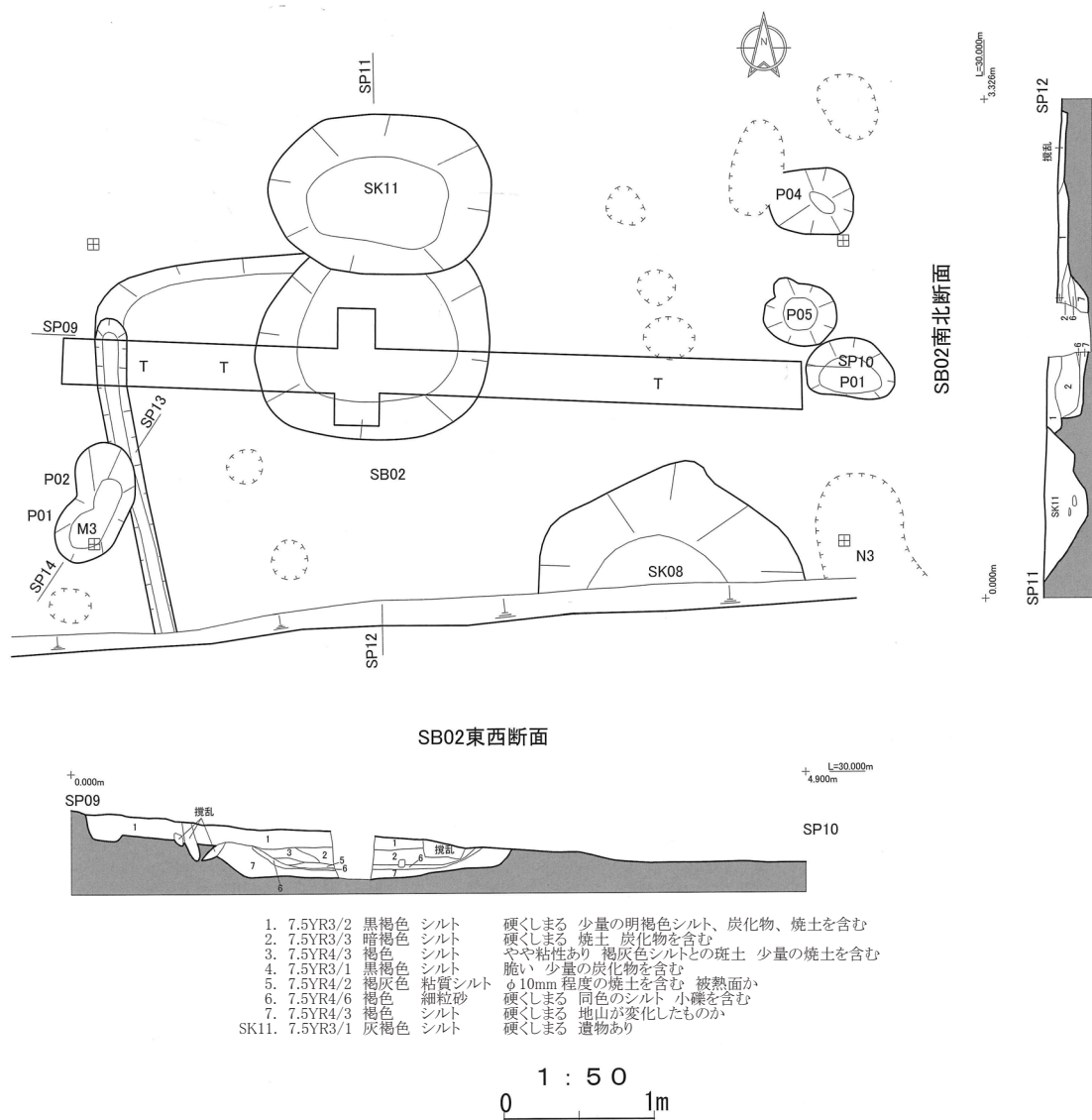


図9 SB02 実測図

33.7 mで東端が26.4 mとなる。

天王平遺跡のこれまでの調査では、遺構面は一面しか検出されておらず、本調査でも同様の結果であった。今回の調査では、包含層が部分的にしか確認されず、表土（灰褐色粘質土層）の直下で地山（橙褐色粘質土層）となるとところが大半であった。この橙褐色粘質土層の下にはほとんど同色でかなり大きな岩を含む礫層となる。従って、場所によっては遺構の埋土もしくは表土を除くと礫が剥き出

しとなる。包含層（暗褐色粘質土層）が確認されたのは、竪穴住居SB01周辺である。包含層の出土遺物として報告するものはこの層から出土した遺物である。遺構の埋土は、黒褐色粘質土層であつたりするが、包含層と区別が付かない場合が多い。

第2節 遺構

(1) 竪穴住居

天王平遺跡では、これまでの調査で63棟

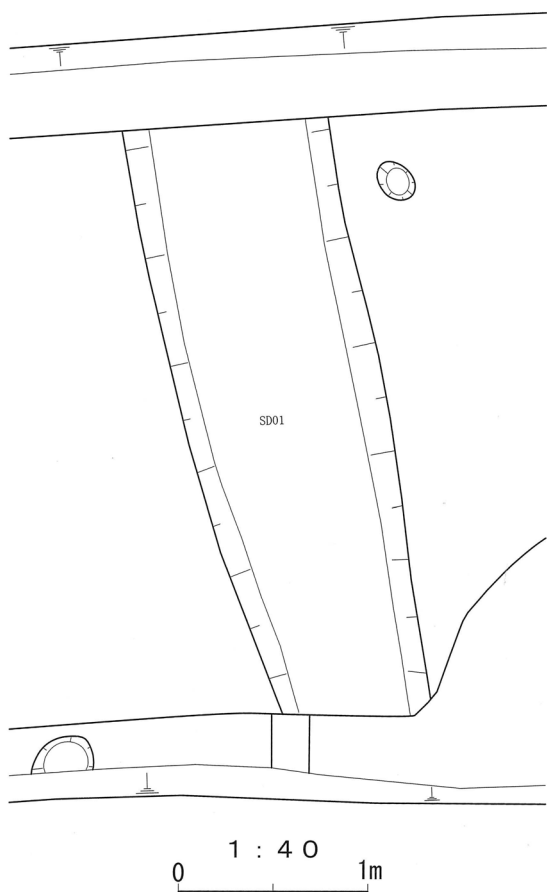


図 10 SD01 実測図

の竪穴住居が検出されている。今回の調査では、2棟検出された。

SB01

南側が調査区外に出ているため全体形は窺い知れないが、東西 4.86 m を図る。遺構面の検出では、東側も流出しているため判然としなかったが、断面での層位観察からの所見である。住居内からは、いくつかのピットが検出され柱穴と思われる。造り付けカマドは、北壁の中央部に設けられている。

出土遺物は、土師器・須恵器である。主に、カマド周辺から出土した。

SB02

SB01 の約 40 m 東側に位置する。SB

01 と同様に全体の規模は不明である。造り付けカマドは、北壁中央に設けられている。

出土遺物は、土師器・須恵器があるが、図化できる遺物はなかった。

(2) 掘立柱建物

今回の調査区では、1 棟だけ確認されたが、これまでの調査では 21 棟確認されている。

SH01

4 基の柱穴が並んで検出され、南側に延びると想定される。柱間（芯々間）が東西約 4 m で、南北約 2 m である。柱列の軸は、ほぼ真北を向いている。残念ながら遺物が出土していないため、時期を明確にできない。

(3) 溝

SD01

調査区東にあり、両端が調査区外にわたっているため、全長は不明である。幅は広いところで 1.1 m を測る。溝底はほぼ平坦である。時期等の詳細は不明である。土師器、須恵器が出土している。

SD02

調査区西端にあり、両端が調査区外にわたっているため、全長は不明で、須恵器と土師器が出土している。東側が流出しているため、形状が不鮮明で複数の土坑が重なっている可能性もあるが、検出時の状況から溝としてとらえた。

SD04

調査区中央にあり、調査区外にのびているため長さはわからないが、幅 0.8 m・深さ 0.8 m である。土師器・灰釉陶器が出土している。

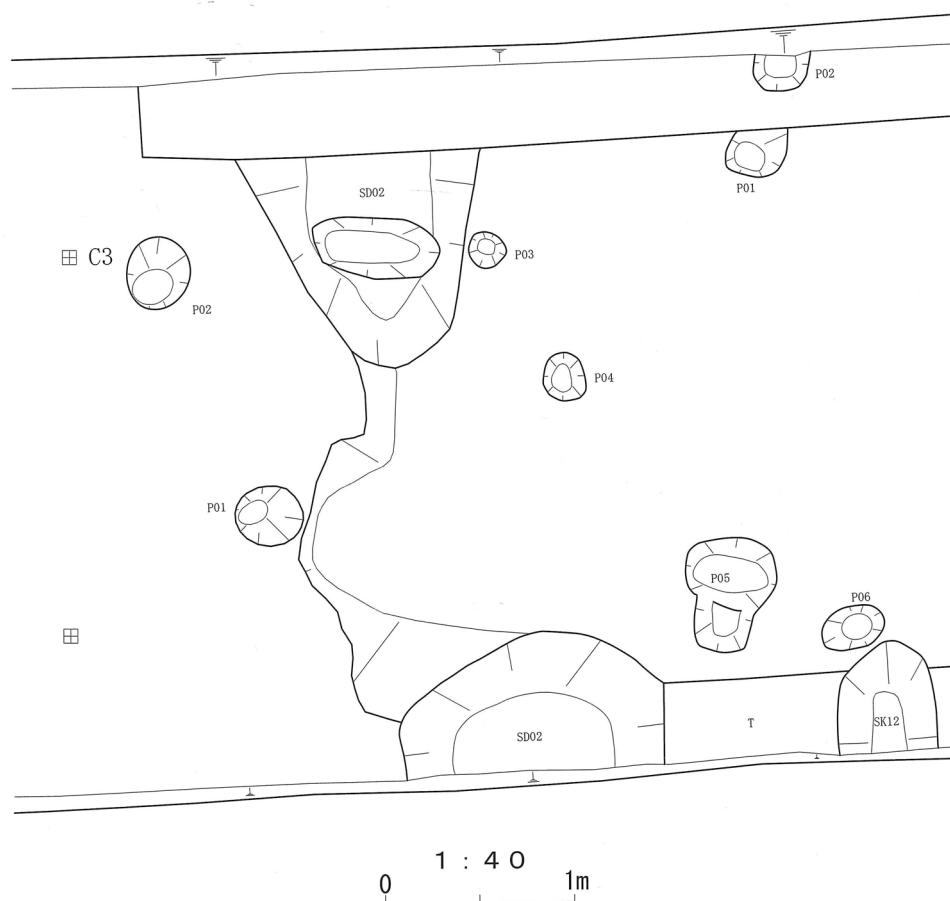


図 11 SD02 実測図

第3節 遺物

(4) 土壇・ピット

今回、多くの土壇が検出されているが、性格を特定できるものはほとんどない。

ピットも多く見られるが性格などは不明と言わざるを得ない。掘立柱建物の柱穴の可能性もあるが、現時点では並んで建物を構成するとの判断はできなかった。A-2 P01 及び A-3 P01 から土師器甕、M-2 P04 からは、ハマグリ・アサリといった二枚貝の貝殻が多数出土した。こういったピットは、これまでも何度か確認されている。

(1) 堅穴住居

SB01

土師器・須恵器が出土している。

土師器

甕(1)は宇田型台付甕で、口径14.0cmである。口縁は横に引き出されて上が面となっている。内外面の口縁から頸部はヨコナデ調整され、外面体部はタテハケである。内面体部は磨耗して調整は不明で、外面には煤が付着している。

甕(2)も宇田型台付甕で、口径15.4cmである。2に比べ口縁端部を横方向へ強く引き出しているため、口縁の上面がややくぼん

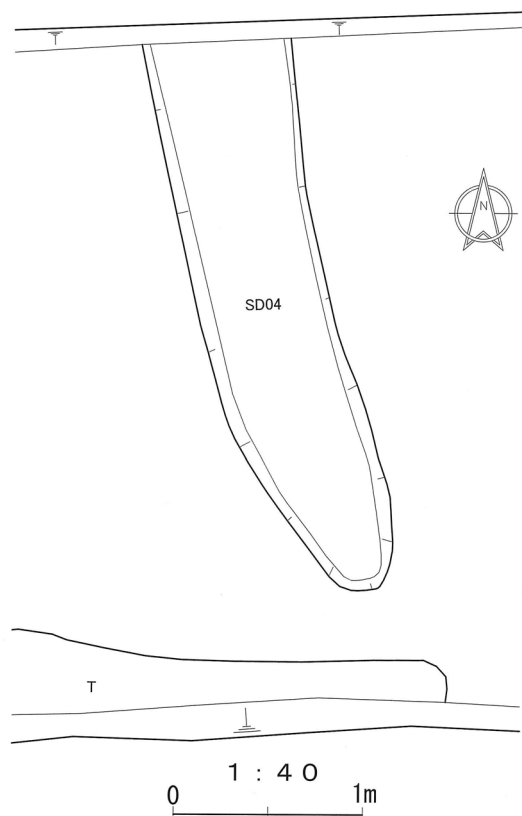


図 12 SD04 実測図

でいる。内外面の口縁から頸部はヨコナデ調整され、外面体部はタテハケである。

壺（３）は口径 15.0 cm で、内面の口縁と頸部はヨコハケ調整で、体部は粗いヨコハケ調整がされている。外面は頸部にヨコナデ、体部にはタテハケがみえる。

壺（４）は底部のみで、内外面ともヘラケズリ調整がされている。

甗（９）は推定径 34.0 cm で外面は摩滅して調整は見て取れない。内面はヨコハケ調整がされている。

須恵器

杯蓋（５）は、口径の推定径は 14.0 cm で体部との境に低い稜があり、口縁部は端部が少し外側に引き出され内面に段ができています。

杯身（７）は最大径 12.0 cm で、生焼けで

調整方法は不明瞭である。

杯身（６）は口径 10.0 cm ・器高 5.0 cm ・最大径 12.2 cm である。外面底部は、ヘラ起しした後にヘラケズリ調整がされている。口縁は高く上方に伸び、端部内側に稜がめぐっている。

杯身（８）は、口径 11.4 cm ・器高 2.8 cm で、最大径は 13.0 cm を測る。ヘラオコシ後、ヘラケズリがされている。

（３）溝

SD01

灰釉陶器が出土している。

灰釉陶器

碗（１０）は、高台径 7.8 cm で三日月高台を持ち、底部外面には糸切り痕が残る。底部外面に墨痕が認められるが字は特定できない。

SD02

土師器・須恵器が出土している。

土師器

甗（１４）は把手部でのみである。円錐形状の把手で、体部にナデ付けられている。内面はヨコナデが認められる。

須恵器

平頂蓋（１１）は口径 14.0 cm ・器高 2.9 cm で赤っぽい色調である。外面中央部はヘラケズリがされ、口縁端部は外側に開くように折り曲げられている。

無台杯（１２）は美濃須衛産のもので、口径 12.0 cm ・器高 4.3 cm ・底径 6.1 cm を測る。内面底部にはロクロ形成の痕跡が明瞭に残り、体部はやや丸みをもって立ち上がっている。外面底部は、ヘラオコシで、ヘラケズリは行われていない。内面底部の中央部は、磨耗している。

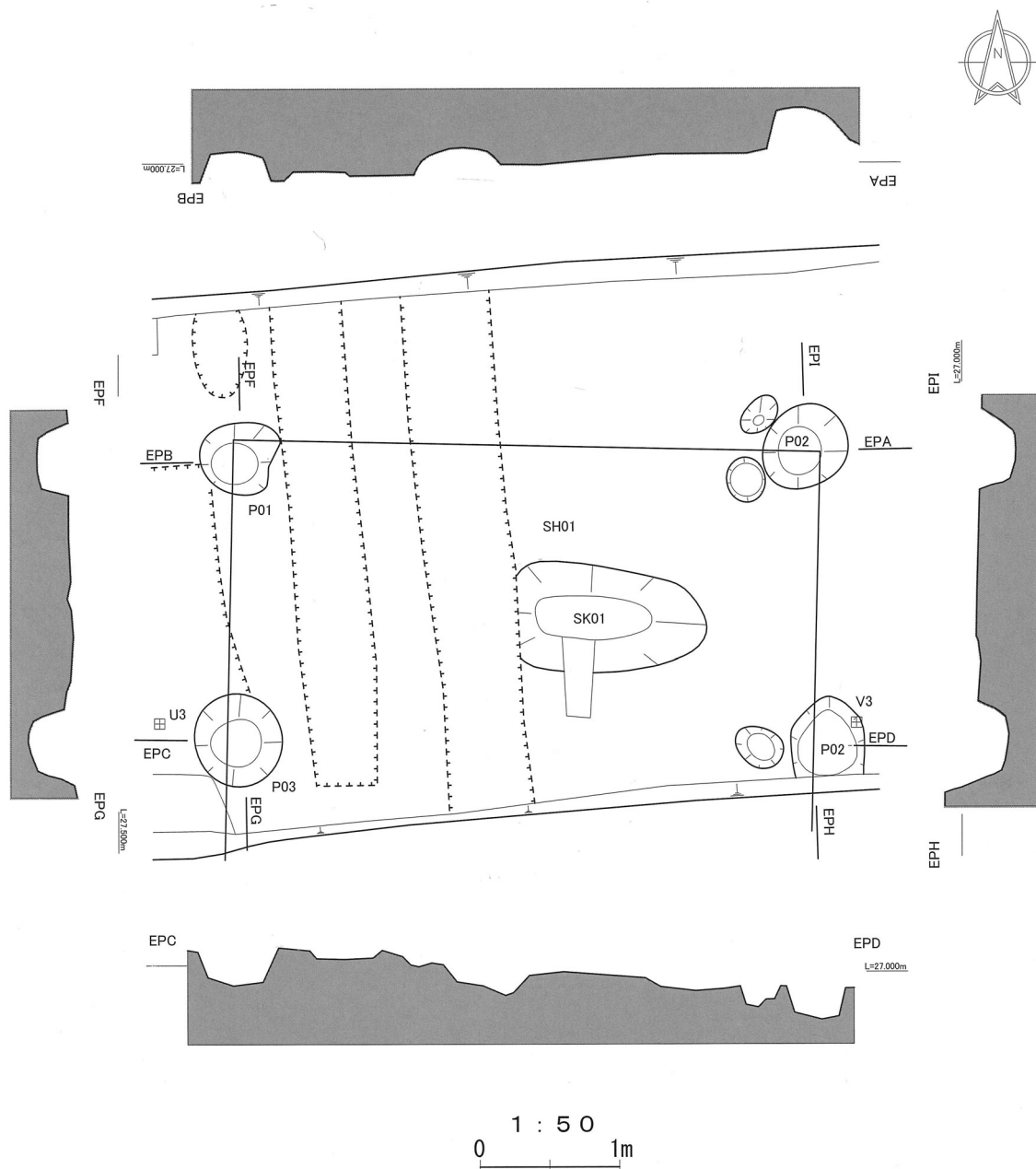


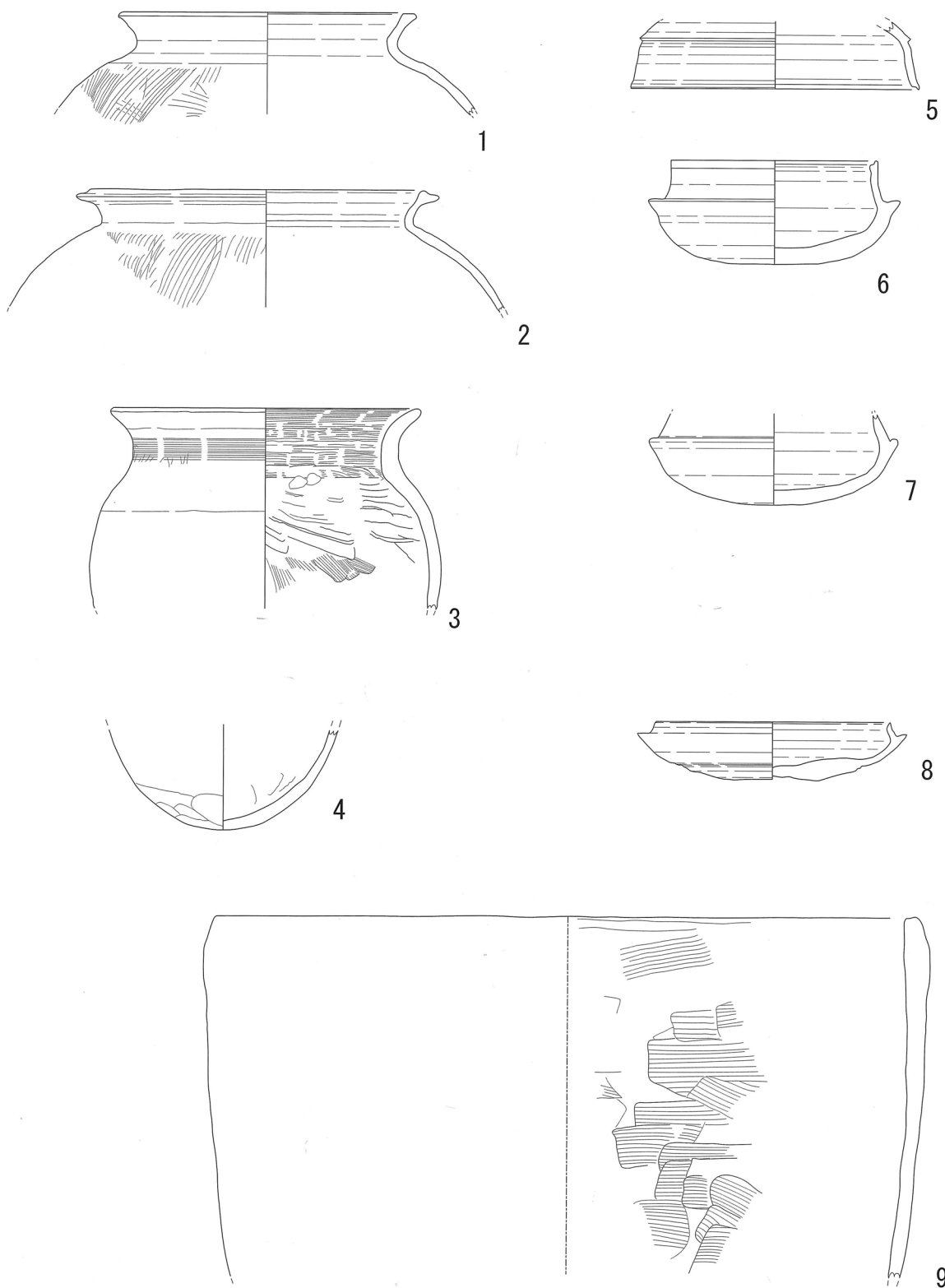
図 13 SH01 実測図

甕 (13) は、口径 25.6 cm で口縁が大きく外側に開き、端部は下方に垂下して縁帯状を呈している。口縁部や体部には自然釉がかかり、特に体部と頸部の境目付近は厚い。頸部には「十」字状のヘラ記号があり、縦→横の順に刻まれている。

(4) Pit

A - 2 P 0 1

土師器甕 (17) は、宇田型甕の口縁部で推定径 14.0 cm である。外側の口縁部から頸部にかけてはヨコナデされ、体部にはタテハケが施されている。



1 : 3
0 1 2 3 4 5 10cm

图 14 SB01 出土遺物実測図

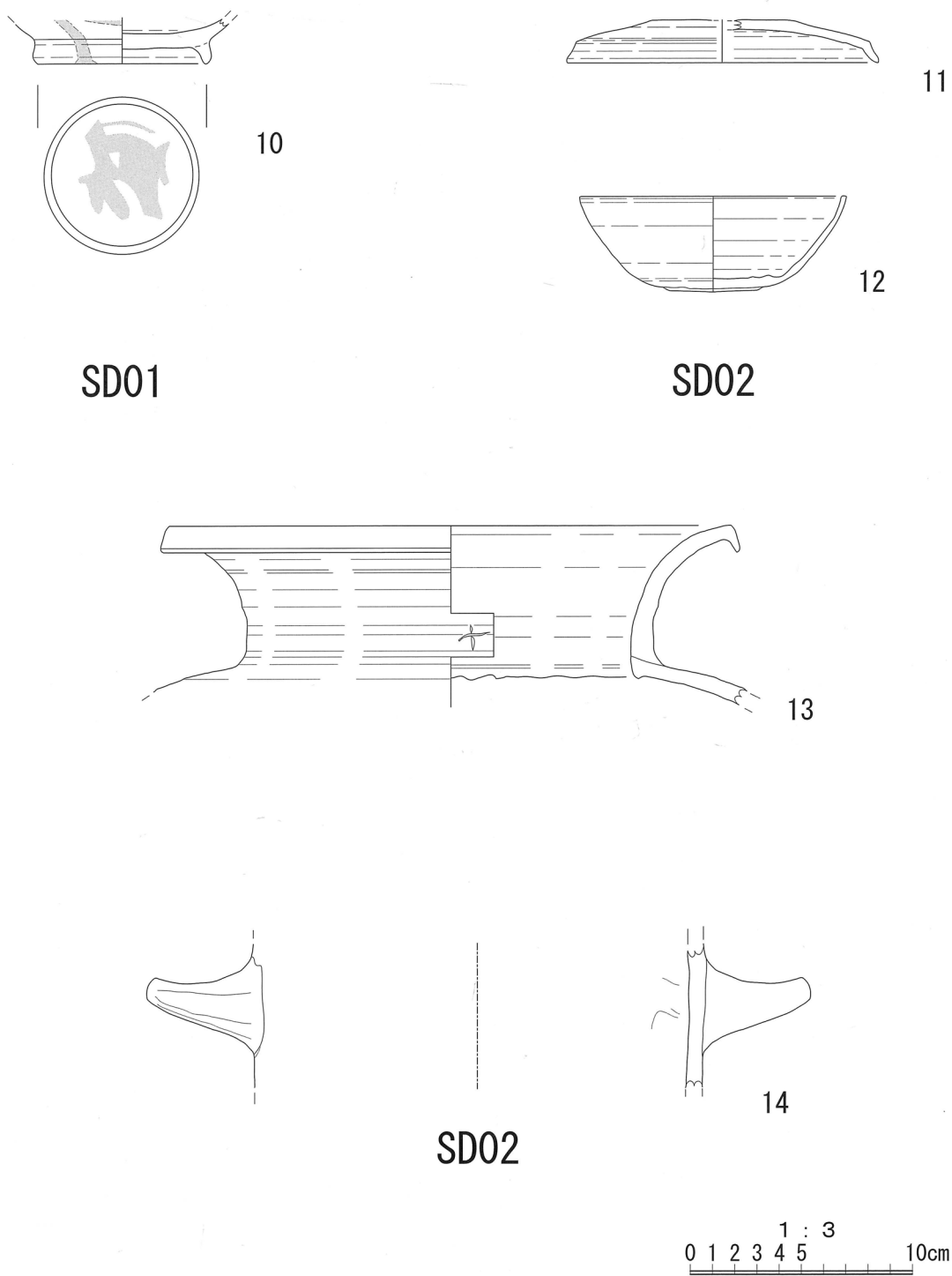


图 15 溝出土遺物実測図

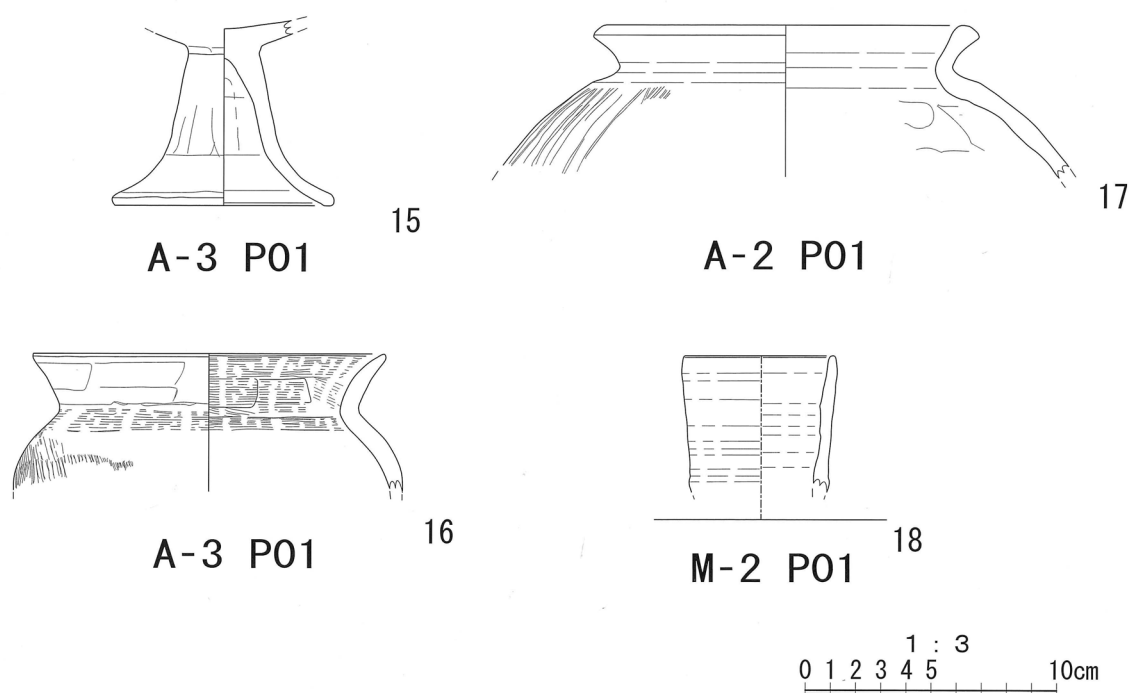


図 16 ピット出土遺物実測図

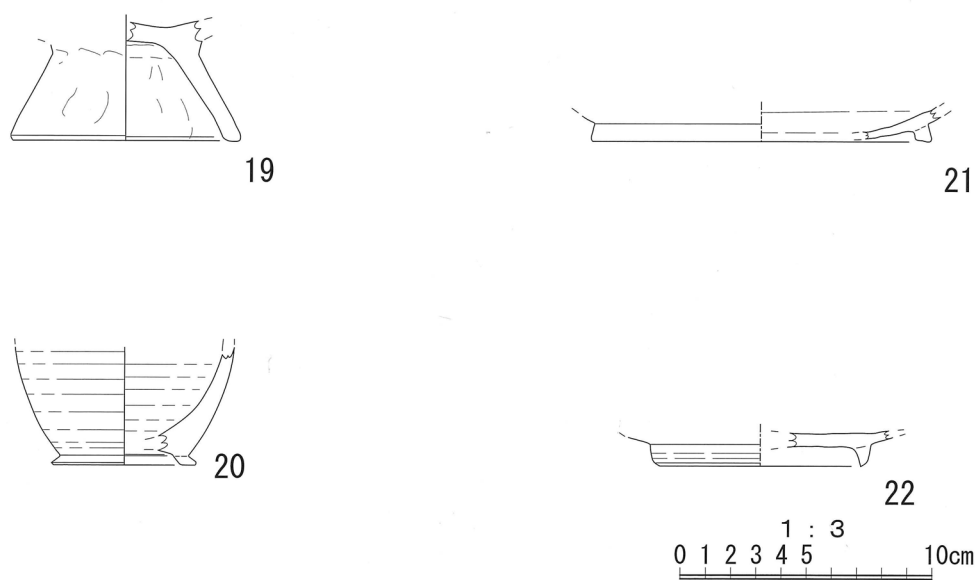


図 17 遺構外出土遺物実測図

A - 3 P O 1

土師器高杯（15）は脚部径 8.8cm で、体部が少し内側に折られている。磨耗や破損のため成形過程はわかりにくい、外面は縦方向にナデが施されている。

土師器甕（16）はやや小形の甕で、口径 14.0cm で逆八の字状にひらく。口縁の内外面はヨコナデされ、体部外面は細かいタテハケが施されている。外面の頸部から体部に掛けて煤が付着している。

M - 4 P O 4

須恵器

（18）は瓶類の口縁部で、口径 6.0cm で平瓶の可能性はある。直線的に上方に引き上げられ、端部は丸く納められている。内外面ともに降灰が認められる。

（5）包含層出土の遺物

包含層である暗褐色土層からは、土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗が出土している。土師器

甕（19）は台付甕の台部で、径が 9.0cm である。明赤褐色を呈し、表面の劣化が進んで調整方法などははっきりしない。

須恵器

有台杯（21）は底部が薄く作られており、外面底部はヘラケズリされている。バチ型の付け高台で、高台端部は使用によって磨耗している。

長頸瓶（20）は、小形の長頸瓶とおもわれ高台径 5.8cm である。内面にはロクロ成形の後がはっきりと見られ、底部には降灰がある。横方向に引き出された高台を持ち、体部下半はヘラケズリがされている。

灰釉陶器

碗（22）は高台径 8.0cm で、外側の稜が弱い三日月高台である。降灰が内面底部に確認できるが、体部が失われているため施釉方法はわからない。

第 3 章 まとめ

今回の調査では、竪穴住居 2 棟・掘立柱建物 1 棟が検出された。竪穴住居 S B 0 1 は出土した土師器・須恵器から 6 世紀代のものと考えられる。これまで、多くの竪穴住居が検出されているが奈良時代から平安時代にかけてのもので、古墳時代の竪穴住居は今回初めて確認された。S B 0 2 は、実測可能な遺物がなく明確に時期決定が出来ないが口縁部端部の断面が三角形となる伊勢型と呼ばれる土師器甕の破片が出土している。したがって、時代は S B 0 1 よりも新しい時期の可能性はあるが、混入の可能性もあり、ここでは同時期の竪穴住居としておく。

天王平遺跡は、散発的に調査が実施されているだけのため、時期別の変遷がどうであったかなどは、まだ掴めていない。今後の資料の蓄積をまって、広大な遺跡の中で、どのように人々が生活していたのかを明らかにしていきたい。

参考文献

- 多度町『多度町史』自然 1997 年
多度町『多度町史』民俗 2000 年
多度町『多度町史』資料編 1 2002 年
多度町教育委員会『多度町遺跡詳細分布地図』
1999 年
伊東春夫『天王平発掘調査報告書』1981 年
多度町教育委員会
谷本鋭次ほか『天王平遺跡発掘調査報告Ⅰ』
1982 年 三重県教育委員会
駒田利治ほか『天王平遺跡発掘調査報告Ⅱ』
1983 年 三重県教育委員会
伊東春夫『南小山廃寺発掘調査報告書』1986
年 多度町教育委員会
渡辺尚登『天王平遺跡発掘調査報告Ⅲ』1993
年 多度町教育委員会
石神教親・松田繁『天王平遺跡発掘調査報告
―第 4・5・6 調査―』2003 年 多度町教
育委員会

図版番号	遺構名	Gr	種類	器種	法量 (cm)			焼成	胎土	色調	釉薬	備考 (調整等)
					口径	器高	底径					
1	SB01	D-3	土師器	甕	(14.0)			良好	やや緻密	にぶい黄橙		
2	SB01	E-2	土師器	甕	(15.4)			良好	やや緻密	にぶい橙		
3	SB01	E-2	土師器	壺	(15.0)			良好	やや緻密	浅黄橙		
4	SB01	E-2	土師器	壺				不良	やや緻密	浅黄橙		
5	SB01	D-3	須恵器	蓋	(14.0)			良好	やや緻密	灰		
6	SB01	E-3 他	須恵器	杯	(10.0)	(5.0)	12.2	良好	緻密	灰		
7	SB01	E-2	須恵器	杯			12.0	不良	やや緻密	灰白		
8	SB01	D-3	須恵器	杯	(11.4)	(2.8)	13.0	良好	やや緻密	灰		
9	SB01	D-3	土師器	甗	(34.0)			不良	やや緻密	橙		
10	SD01	S-2	灰釉陶器	碗			7.8	良好	やや緻密	にぶい黄橙	灰釉	墨書
11	SD02	C-3	須恵器	蓋	(14.0)	2.9		良好	やや緻密	赤		
12	SD02	C-3	須恵器	杯	(12.0)	4.3	6.1	良好	やや緻密	灰白		降灰あり・重ね焼き痕あり
13	SD02	C-3	須恵器	甕	25.6			良好	やや緻密	灰色		降灰あり
14	SD02	C-3	土師器	甗				やや不良	やや緻密	にぶい黄橙		
15	Pit01	A-3	土師器	高杯脚部			8.8	良好	緻密	明赤褐色		
16	Pit01	A-2	土師器	甕	(14.0)			良好	やや緻密	にぶい黄橙		
17	Pit01	A-3	土師器	甕	(14.0)			良好	緻密	浅黄橙		
18	Pit04	M-2	須恵器	平瓶	(6.0)			良好	やや緻密	灰白		降灰あり
19	検出		土師器	台付甕			9.0	不良	やや緻密	明赤褐色		
20	包含層	C-3	須恵器	長頸瓶			(5.8)	良好	緻密	灰		
21	検出		須恵器	杯				良好	やや緻密	灰		
22	検出	Q-3	灰釉陶器	碗			(8.0)	良好	やや緻密	灰白		
備考	法量は、反転復元して求めた数値の場合カッコ書きで記した。残存率が、6分の1以下のものについては、反転復元図を載せていても中心線を波線にして区別し、一覧表では法量を記していない。焼成は良好・やや不良・不良の三段階で、胎土は緻密・やや緻密・やや粗雑・粗雑の四段階で示した。											

表 1 出土遺物計測表

写真図版



前半区完掘状況（東から）



後半区完掘状況（西から）



SB01 遺物出土状況（南から）



SB01 カマド遺物出土状況（南から）



SB01 完掘状況（南から）



SB02 カマド完掘状況（東から）



SB02 完掘状況（東から）



SD02 遺物出土状況（西から）



SD02 完掘状況（南から）



SH01 完掘状況（西から）



1



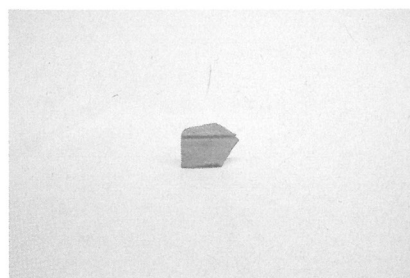
2



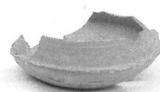
3



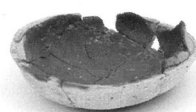
4



5



6



7



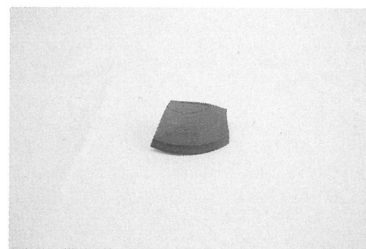
8



9



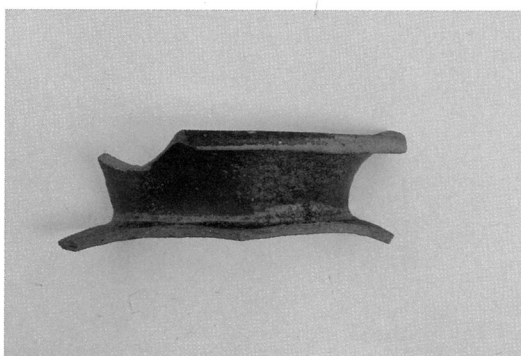
10 (SD01)



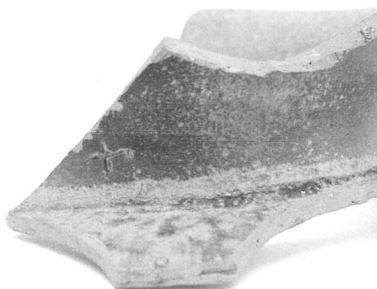
11 (SD02)



12 (SD02)



13-1 (SD02)



13-2 (SD02)

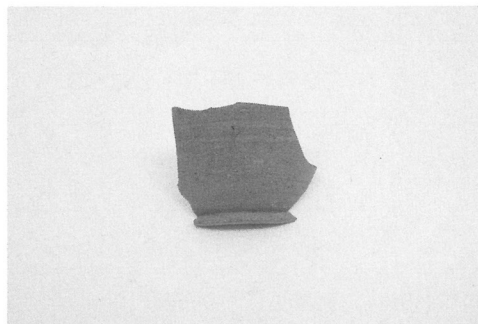


14 (SD02)

溝出土遺物



15



19



16



20



17



21



18



22

報 告 書 抄 録								
ふりがな		てんのうびらいせきはつくつちょうさほうこく						
書名		天王平遺跡発掘調査報告						
副書名		―第 7 次調査―						
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名		石神教親						
編集機関		桑名市教育委員会多度支局						
所在地		〒 511-0198 三重県桑名市多度町多度 1 丁目 1 番地 1						
発行機関		桑名市教育委員会						
所在地		〒 511-8601 三重県桑名市中央町 2 丁目 37 番地						
発行年月日		西暦 2007（平成 19）年 3 月 31 日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	区市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
てんのうびらいせき 天王平遺跡	みえけんくわなし 三重県桑名市 たどちょうおやま 多度町小山 あざてんのうびら 字天王平	205	b57	35° 7' 55"	136° 38' 21"	20060925 ～ 20061208	500.0m ²	市道天王平 5 号線新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
天王平遺跡	散布地	古墳時代	堅穴住居跡 溝	2 棟 1 条	土師器 須恵器		今回の調査では、古墳時代の堅穴住居 2 棟が確認された。	
		奈良時代 ～ 平安時代	ピット 掘立柱建物跡 溝 土壇 ピット	1 基 4 条	土師器 須恵器 灰釉陶器			

天王平遺跡発掘調査報告―第7次調査―

発	行	桑名市教育委員会 〒511-8601 三重県桑名市中央町2-3-7	
編	集	桑名市教育委員会多度支局 〒511-0198 三重県桑名市多度町多度1-1-1	
印	刷	西濃印刷株式会社 〒500-0874 岐阜市七軒町15番地	
発	行	日	平成19年3月31日



この印刷物は古紙配合率70%再生紙と環境にやさしい植物性大豆インキを使用しています。